

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

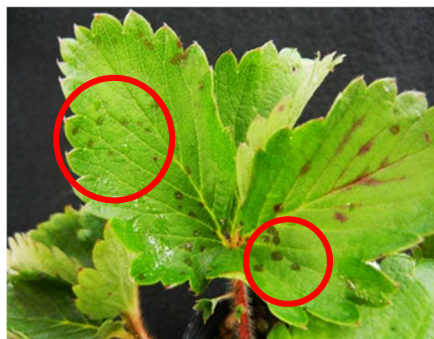
令和 8 年度病虫害発生予報第 5 号 (8 月) について

このことについて、病虫害発生予報第 5 号を発表したので送付します。

予報第 5 号

イチゴ炭疽病に注意しましょう

7 月 5 半月調査では一部ほ場で多発生が確認されました。保護殺菌剤による予防散布を徹底するとともに、下図のような感染が疑われる株の処分を実施してください。特に台風や大雨の発生後はイチゴ炭疽病の感染拡大に警戒が必要です。また、低温処理にあたっては健全な株を選別して入庫するようにしてください。



薄墨色の初期病斑



黒色陥没病斑による折損



萎凋した株

図 イチゴ炭疽病の典型的症状

< 予想される向こう 1 か月の天候 (令和 8 年 7 月 25 日～8 月 24 日) >

暖かい空気に覆われやすいため向こう 1 か月の気温は高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。期間の前半は、高気圧に覆われやすいため向こう 1 か月の日照時間は多く、降水量は平年並か少ないでしょう

向こう 1 か月の気温・降水量・日照時間 (数値は予想される出現確率)

九州北部地方	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並20 高70% 高い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み	少20 並30 多50% 多い見込み

(福岡管区气象台 令和 8 年 7 月 23 日発表 1 か月予報より抜粋)

8月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現 況 (発生量)	8月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稻 (普通期)	いもち病 紋枯病 セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ イネカメムシ 斑点米カメムシ類	並 — やや少 やや少 多 多 やや多	並 — やや少 並 多 多 やや多	並 並 やや多 多 多 並 並
大豆	ハスモンヨトウ	並	やや多	やや多
かんきつ	黒点病 ミカンハダニ	並 やや少	並 並	並 並
なし	ハダニ類 ナシヒメシンクイ	並 並	並 並	やや多 並
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類 カキノヘタムシガ	並 少 多 少	やや少 やや少 多 やや少	やや少 並 並 やや少
果樹共通	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ他)	多 ³⁾	— ³⁾	多 ³⁾
イチゴ (育苗期)	炭疽病 ハダニ類	やや多 やや多	やや多 やや多	やや多 やや多
アスパラガス	斑点性病害(斑点病・褐斑病) アザミウマ類	並 並	— ⁴⁾ — ⁴⁾	並 並
野菜共通	コナジラミ類	やや多	やや多 ⁵⁾	やや多
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメヨコバイ チャトゲコナジラミ	やや多 やや少 多 並 やや少 並 やや少	並 並 多 やや多 並 やや多 並	やや多 並 多 やや少 やや多 やや多 並

注1) 予報の発生量は、平年および前年と比較を「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生(－)、やや少発生(－～±)、並発生(±)、やや多発生(±～＋)、多発生(＋)として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

注3) 果樹共通・果樹カメムシ類の発生量は、年次間変動が大きいため、前年比としています。

注4) アスパラガスの調査は2024年から開始されたため、平年値がなく、前年比を記載しています。

注5) 野菜共通・コナジラミ類では各地点の調査開始～2025年までの平均値を平年としています。

【普通作物：水稻】

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

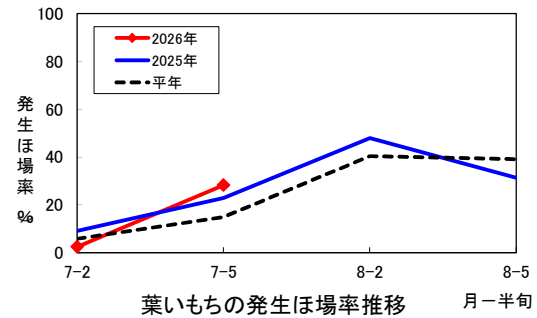
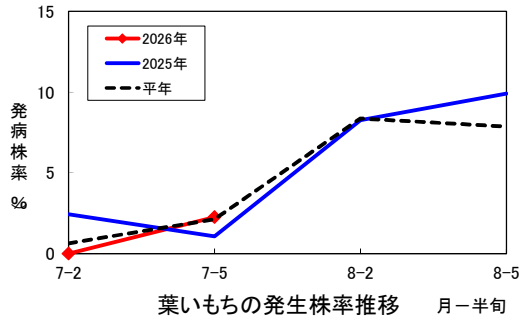
（2）予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 2.3%（平年 2.1%、前年 1.1%）

発生ほ場率 28.3%（平年 14.9%、前年 22.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、少発生の条件となっている（－）。



（3）防除上注意すべき事項

ア 発生状況は地域・品種・ほ場等で大きく異なるため、必ずほ場の状況を確認する。

イ 本病は、病斑が少なくても大量の胞子を飛散するので、発生ほ場では穂いもち抑制のため薬剤防除を徹底する。また、多発生ほ場では穂肥を控える。

ウ 穂いもちに対する薬剤防除は、出穂前の予防散布を基本とする。

エ 薬剤感受性低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ 農薬の使用および散布等にあたっては、最終頁の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

2 紋枯病

（1）予報の内容

発生量：前年並

（2）予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は前年並であった。

発病株率 0%（前年 0.05%）

発生ほ場率 0%（前年 4.2%）

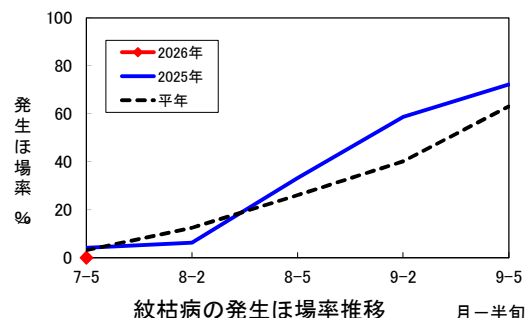
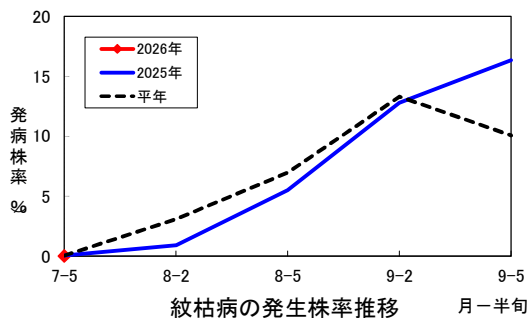
※令和6年度（2024年）から7月5半旬調査を開始したため、平年値はない。

イ 向こう1か月の気象予報では、並～やや多い発生の条件となっている（±～+）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 密植や多肥栽培ほ場、昨年多発生したほ場などでは発病しやすい傾向があるため、発病が認められたら早めに防除を行う。

イ 出穂期以降、病斑の上位進展が認められる場合は補正防除を行う。



3 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

10株当たり払い落とし成幼虫数 1.8頭（平年 4.5頭、前年 0.1頭）

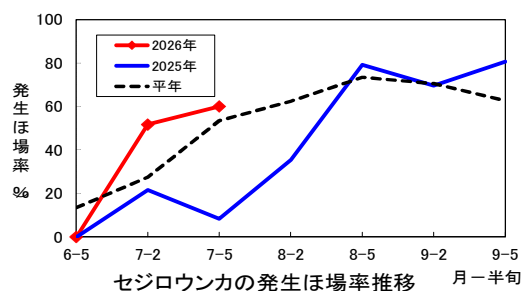
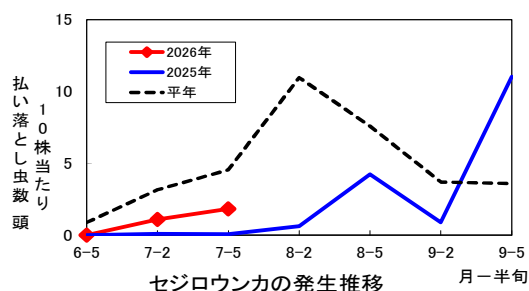
発生ほ場率 60.0%（平年 53.3%、前年 8.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 使用した育苗箱施薬剤の種類によって発生量に差を生じる可能性があるため、ほ場における発生状況を確認する。

イ 幼穂形成期～穂揃期に吸汁加害を受けると、下位茎葉の黄変枯死や出穂遅延、もみ数の減少などの被害が生じるため、幼虫の発生が多い場合は薬剤防除を実施する。



4 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

10株当たり払い落とし成幼虫数 0.01頭（平年 0.8頭、前年 0頭）

発生ほ場率 2.2%（平年 11.3%、前年 0%）

イ 県内5か所の予察灯における誘殺数が平年より多く、飛来量は平年より多い（+）。

5月1半旬～7月4半旬の5か所合計 15頭（平年 9.3頭、前年 0頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

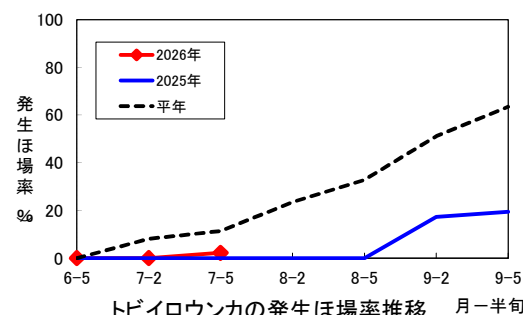
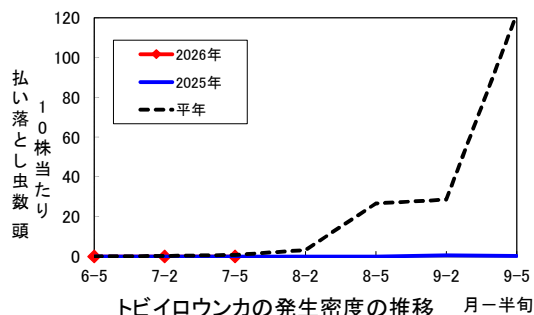
ア 地域や移植時期により、飛来時期・飛来量は異なる。また、使用した育苗箱施薬剤の種類によって発生量に差を生じる可能性があるため、必ずほ場における発生状況を確認する。なお、移植後1か月以上経過した場合、育苗箱施薬剤が施用された水稻でも増殖しやすい。

イ 本種は8月以降急激に増加する。病虫害防除所ホームページ

(<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#suitou>) の発生予測パターン図を参考にして、防除適期である若齢幼虫期に薬剤防除を行う。

ウ 本種は株元に生息しているため、防除薬剤が株元に十分かかるよう丁寧に散布する。

エ 無人航空機による防除を気温が高い時間帯に実施すると、水稻の株元に到達する前に気化し、防除効果が低下する場合があるので、できる限り気温が上昇する前の早朝に実施する。



※福岡県の要防除水準（中老齢幼虫合計値で示す）

飛来後第1世代：100株当たり 20頭以上

飛来後第2世代：100株当たり 100頭以上

5 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

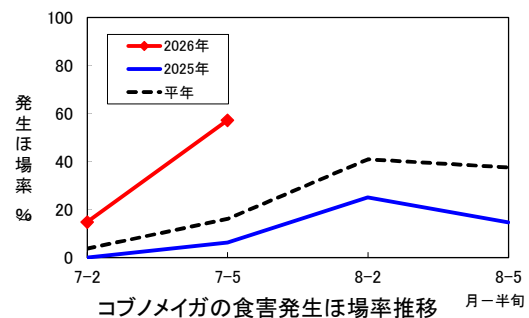
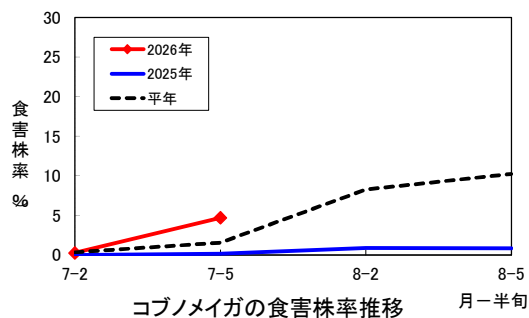
食害株率 4.7% (平年 1.5%、前年 0.1%)

食害株発生ほ場率 57.1% (平年 16.0%、前年 6.3%)

30 m²当たり払出し成虫数 0.9頭 (平年 0.2頭、前年 0.1頭)

成虫発生ほ場率 32.6% (平年 10.8%、前年 12.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 一部の箱施薬剤で薬剤感受性の低下が確認されており、使用薬剤の種類によって害虫の発生量に差が生じる可能性があるため、必ずほ場における発生状況を確認する。

イ 防除適期は発蛾最盛期から1週間後である。

ウ 薬剤防除を行う際は、発生状況や病虫害防除所ホームページ

(<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#suitou>) の発生予測パターン図を参考に行う。

6 イネカメムシ (※令和8年7月29日付け注意報第3号(斑点米カメムシ類)を参照)

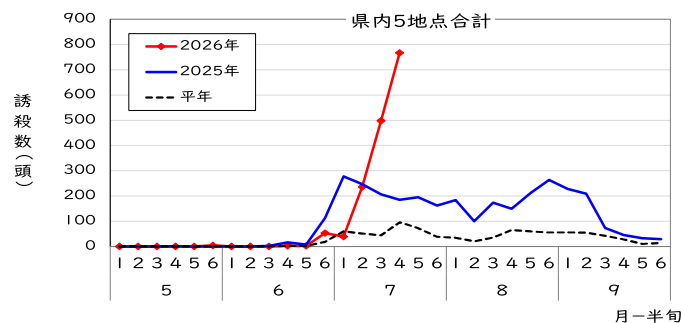
(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 県内5か所の予察灯(筑紫野市、糸島市、遠賀町、みやま市、荏田町)における5月1半旬～7月4半旬までの誘殺数は、平年より多かった(+)。

イネカメムシ 955頭 (平年 274.0頭、前年 1054頭)



予察灯におけるイネカメムシの誘殺数の推移

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

イ イネカメムシは出穂直後から本田へ飛来して吸汁加害するため、他の斑点米カメムシ類の防除適期と異なるので注意する。イネカメムシの防除適期は出穂期とその7～14日後である。また、周囲より出穂が早いほ場では出穂期に集中的に加害を受けると不稔穂が発生し、収量に影響するため注意する。

7 斑点米カメムシ類（※令和8年7月29日付け注意報第3号（斑点米カメムシ類）を参照）

（1）予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

（2）予報の根拠

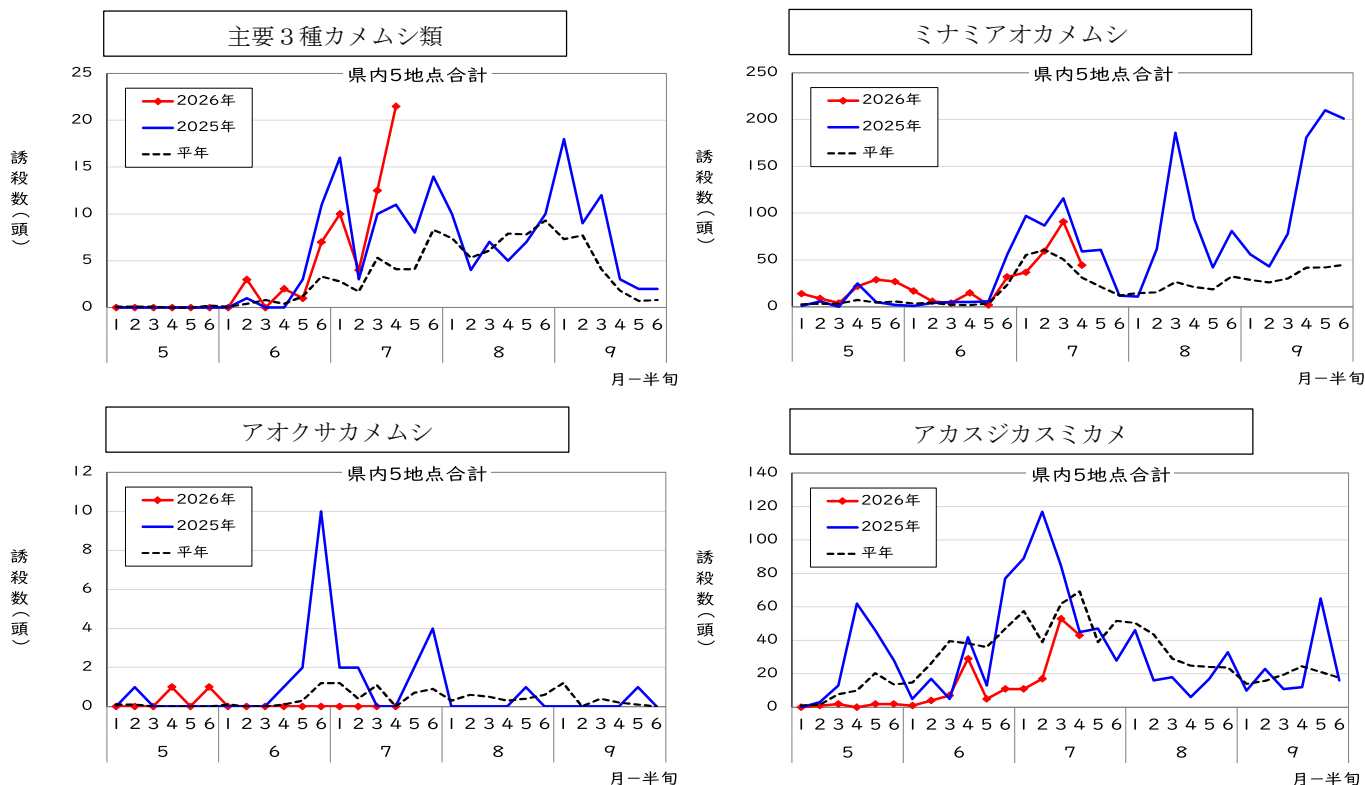
ア 県内5か所の予察灯における5月1半旬～7月4半旬までの誘殺数は、平年よりやや多かった（±～+）。

主要3種カメムシ（クセハリカメシ、ホハリカメシ、シロホカメシ）42頭（平年 20.6頭、前年 55頭）

ミナミアオカメムシ 381頭（平年 264.9頭、前年 475頭）

アオクサカメムシ 2頭（平年 4.6頭、前年 18頭）

アカスジカスミカメ 152頭（平年 483.6頭、前年 647頭）



予察灯における斑点米カメムシ類の誘殺数の推移

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 防除は、穂揃期とその7～10日後の2回防除が基本であるが、その後も発生が見られる場合は、追加防除を行う。

イ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

ウ 斑点米カメムシ類の飛来・増殖源である畦畔・休耕田の草刈りを出穂2週間前までに実施する。なお、出穂後の草刈りは、本虫のほ場内への侵入を助長するので避ける。

【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

（1）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

（2）予報の根拠

ア 7月1～5半旬の県内3か所のフェロモントラップにおける誘殺数は、平年並であった（±）。ただし、発生量には地域差がある。

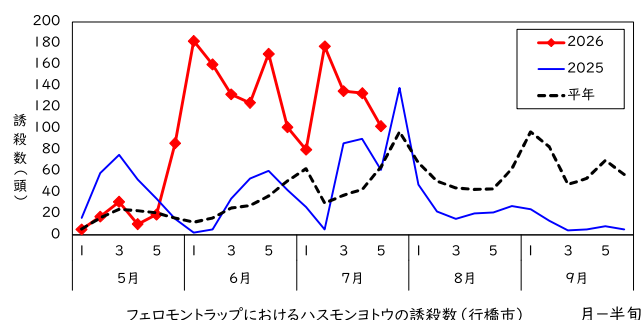
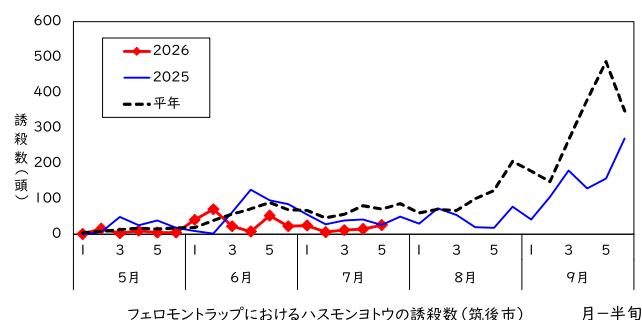
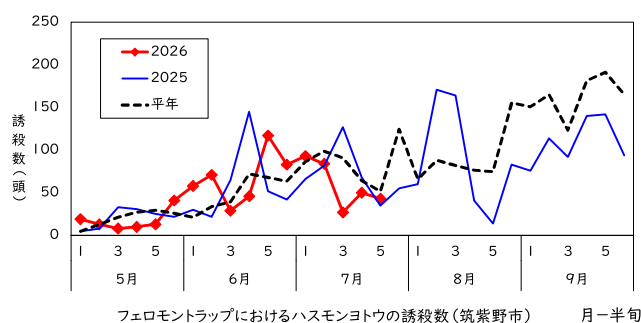
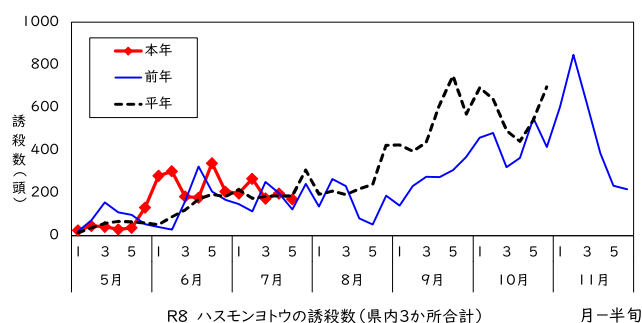
3か所合計 1008頭（平年 949.4頭、前年 838頭）

筑紫野市 297頭（平年 392.1頭、前年 378頭）

筑後市 84頭（平年 322.4頭、前年 192頭）

行橋市 627 頭（平年 234.9 頭、前年 268 頭）

イ 向こう 1 か月の気象予報では、並～多発生の条件となっている（±～+）。



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺数の推移

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去するとともに、白変葉の発生が多い場合は、防除を行う。
- イ フェロモントラップを活用した防除適期の目安は、誘殺ピークから 10 日頃であるが、地域によって誘殺消長に差があるため、ほ場でのハスモンヨトウや白変葉の発生状況を観察して防除の要否や時期を決定する。
- ウ 食害による減収量が大きいのは開花後 7～20 日頃（8 月下旬～9 月上旬）である。この時期に白変葉が多い場合は直ちに防除を行う。
- エ 一部の薬剤で、薬剤感受性の低下が懸念されることから、薬剤の選定に留意する。

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 7 月 5 半月調査の結果、発生量は平年並だった（±）。

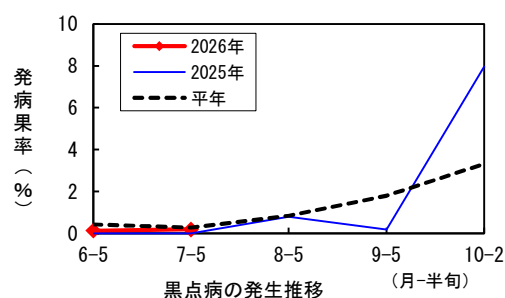
発病果率 0.2%（平年 0.3%、前年 0%）

発病ほ場率 18.2%（平年 31.4%、前年 0%）

- イ 向こう 1 か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。
- イ 前回防除後の積算降水量や散布間隔に応じた適期防除を行う。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

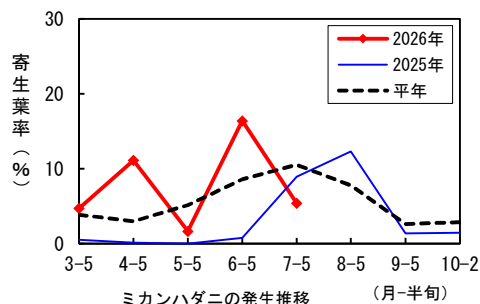
寄生葉率 5.4%（平年 10.5%、前年 8.9%）

発生ほ場率 36.4%（平年 48.4%、前年 45.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量： 平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

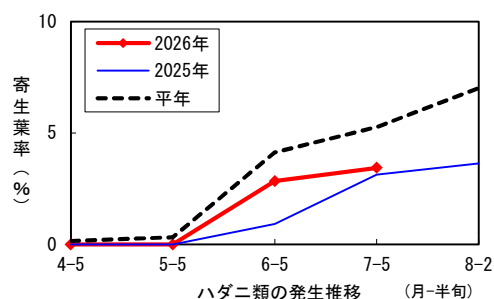
寄生葉率 3.4%（平年 5.3%、前年 3.1%）

発生ほ場率 50.0%（平年 44.4%、前年 66.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発生すると防除が困難になるので、発生が少ない時期に防除を徹底する。また、薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。



2 ナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

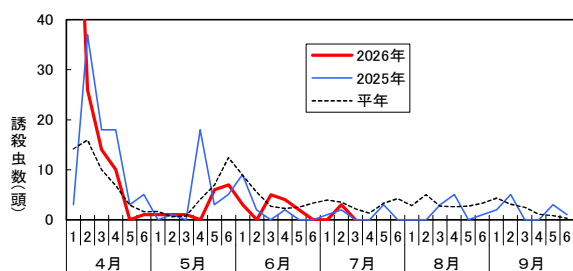
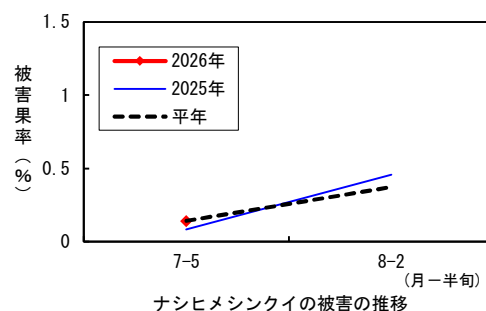
被害果率 0.14%（平年 0.14%、前年 0.08%）

発生ほ場率 16.7%（平年 18.4%、前年 16.7%）

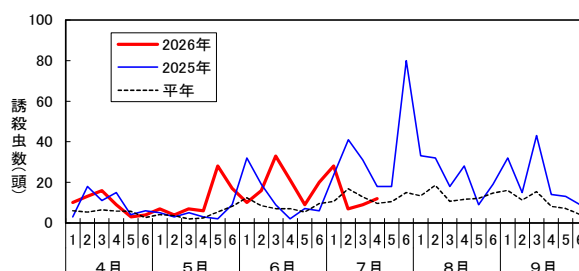
イ 第2～3世代と考えられる6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップにおける雄成虫誘殺数は、朝倉市でやや少なく（－～±）、八女市でやや多かった（±～＋）。

<朝倉市> 17頭（平年 35頭、前年 16頭）

<八女市> 165頭（平年 100頭、前年 189頭）



ナシヒメシンクイ誘殺虫数（朝倉市杷木大山）



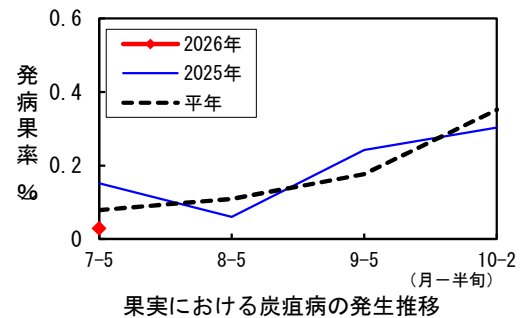
ナシヒメシンクイ誘殺虫数（八女市黒木町木屋）

- ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 8月以降の第4世代発蛾最盛期直後の若齢幼虫期を目安に防除を行う。
また、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。
- イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除に当っては果実に薬液が十分かかるように散布する。
- ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。

【果樹：かき】

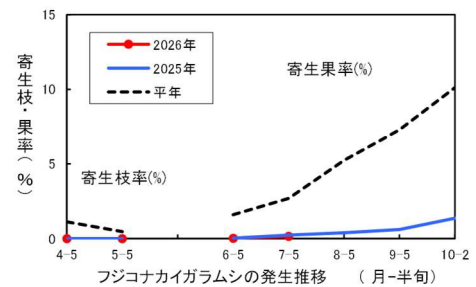
1 炭疽病

- (1) 予報の内容
発生量： 平年・前年よりやや少
- (2) 予報の根拠
- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並だった（±）。
- 発病果率 0.03%（平年 0.08%、前年 0.15%）
発病果は場率 9.1%（平年 12.1%、前年 18.2%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



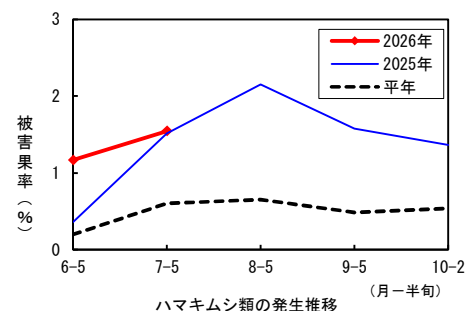
2 フジコナカイガラムシ

- (1) 予報の内容
発生量： 平年よりやや少、前年並
- (2) 予報の根拠
- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
- 寄生果率0.2%（平年 2.7%、前年 0.2%）
発生は場率27.3%（平年 66.1%、前年 45.5%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 薬剤防除に当たっては、天敵への影響が比較的少ない薬剤を選択する。なお、果樹カメムシ類の防除等でやむを得ずフジコナカイガラムシの天敵に影響のある薬剤を使用する際は、リサーチが起る可能性があるためフジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。
- イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。
- ウ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵や交信攪乱剤等を利用した総合防除を積極的に実施する。



3 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）

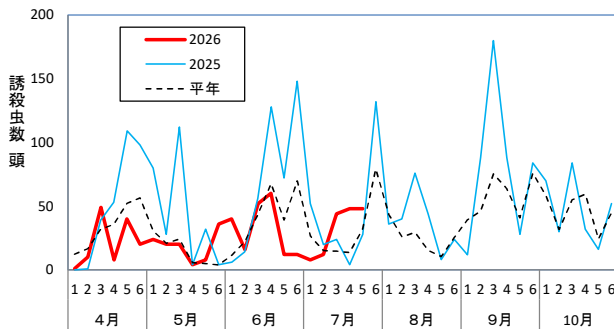
- (1) 予報の内容
発生量： 平年より多、前年並
- (2) 予報の根拠
- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。
- 被害果率 1.5%（平年 0.6%、前年 1.5%）
発生は場率 81.8%（平年 50.0%、前年 81.8%）



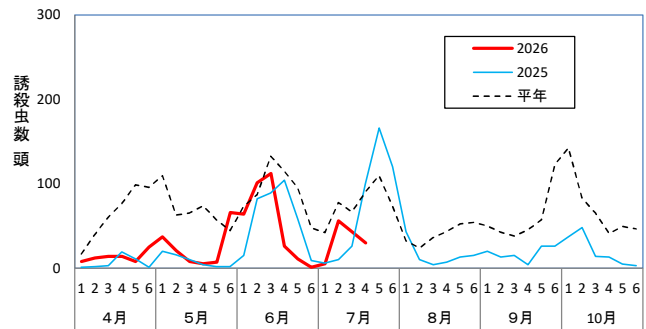
イ 第2～3世代と考えられる6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップにおける雄成虫誘殺数は、うきは市で平年並（±）、八女市で平年よりやや少なかった（－～±）。

誘殺数：チャノコカクモンハマキ <うきは市> 304頭（平年 324頭、前年 524頭）
 <八女市※> 449頭（平年 828頭、前年 499頭）
 チャハマキ <うきは市> 3頭（平年 4頭、前年 1頭）
 <八女市※> 17頭（平年 52頭、前年 0頭）

※八女市のフェロモントラップは2024年度に移転したため、過去データとの比較は参考値となる。



チャノコカクモンハマキ(うきは市)



チャノコカクモンハマキ (八女市)

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハマキムシ類は世代数が多く発生期間が長いので、各態の虫が混発している。発生が多い園では成虫の発生時期と量に注意し、発蛾最盛期7～10日後の若齢幼虫を対象に防除を徹底する。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。

4 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は少発生であった（－）。

発生果率 0%（平年 0.06%、前年 0.03%）

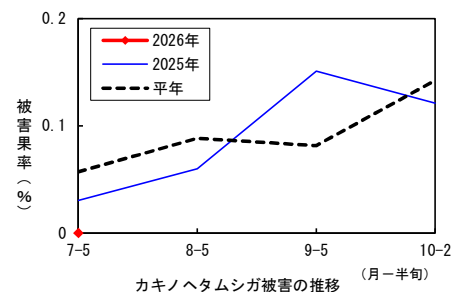
発生ほ場率 0%（平年 9.2%、前年 9.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上～中旬の第1世代成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の10日後頃の防除を実施する。

イ 孵化後の幼虫は果梗部やヘタの部分から果実に入食するため、散布むらがないよう丁寧に散布する。



カキノヘタムシガ被害の推移 (月－半旬)

【果樹共通】

1 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ他）

(1) 予報の内容

発生量：前年より多

発生時期：ヒノキ球果口針鞘数調査の結果、8月中旬以降の飛来が予測される。

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、なしおよびかきでの被害果は平年並だった（±）。

なし 被害果率 0.4%（平年 0.4%、前年 0.1%）

発生ほ場率 41.7%（平年 30.8%、前年 16.7%）

かき 被害果率 0.4%（平年 0.40%、前年 0.03%）

発生ほ場率 18.2%（平年 27.7%、前年 9.1%）

- イ 4月1半旬～7月4半旬までのフェロモントラップによる成虫誘殺数は、前年・前々年より多かった(+)。
成虫誘殺数 <筑紫野市> 15,341頭(前年 406頭、前々年 9,904頭)
- ウ 7月5半旬のヒノキ球果ビーティングによる成幼虫捕獲虫数は平年よりやや多く、前年より多かった(±～+)。
成幼虫捕獲虫数 8.7 頭(平年 6.8 頭、前年 0.9 頭)
- エ 7月5半旬の14地点のヒノキ1球果当たりの平均口針鞘数と、離脱時期予測は下記のとおり。
県下平均：8.2本/果 ⇒ 離脱時期予測は8月14日頃
朝倉地域：9.1本/果 ⇒ 離脱時期予測は8月12日頃
久留米地域：9.8本/果 ⇒ 離脱時期予測は8月10日頃
筑後地域：9.0本/果 ⇒ 離脱時期予測は8月10日頃
福岡・北九州・筑豊地域：6.1本/果 ⇒ 離脱時期予測は8月20日頃
※詳細は、令和8年7月28日付技術情報第6号(果樹カメムシ類)を参照。
- オ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 果樹園への飛来時期は地域により異なる。また、同一園内でも被害発生状況には偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。
- イ 広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。
- ウ この予測は7月5半旬時点でのデータに基づくものであり、今後の発生状況については病害虫防除所ホームページを参照する。

【野菜：イチゴ(育苗期)】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、一部ほ場で多発生となり、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

発生株率 0.2%(平年 0.06%、前年 0.03%)

発生ほ場率 14.3%(平年 12.1%、前年 14.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 昨年多発生したほ場では、特に下記の項目を遵守し、防除を徹底する。

イ 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがある。ほ場内での発生状況に注意し、発病株や周辺株を速やかに持ち出し処分する。

ウ 育苗床の湿度が高いと発病しやすく、雨媒伝染により感染が拡大するため、苗の間隔を空けて通風を図る。

エ 窒素肥料を多用すると発病しやすいため、適正な肥培管理に努める。

オ 葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的な予防散布を行う。

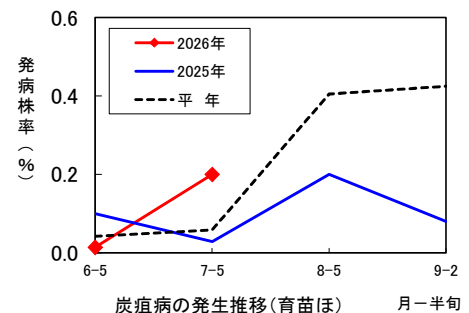
カ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。令和7年度病害虫発生予察技術情報第13号(イチゴ炭疽病菌薬剤感受性検定結果)を参照。

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/attachment/277102.pdf>

キ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に生育状況を確認し、健全苗を選抜する。

ク 入庫前や陽光処理時のかん水は過度にならないように注意する。

ケ 入庫する際は、加湿を避けるために苗を詰めすぎないように注意する。



2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

寄生株率 3.1%（平年 5.2%、前年 4.7%）

発生ほ場率 57.1%（平年 34.7%、前年 28.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 多発生条件では防除が困難になるので、初発段階での防除に努める。

ウ 寄生株は葉かきを強めに行い、寄生葉を取り除くよう努める。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。

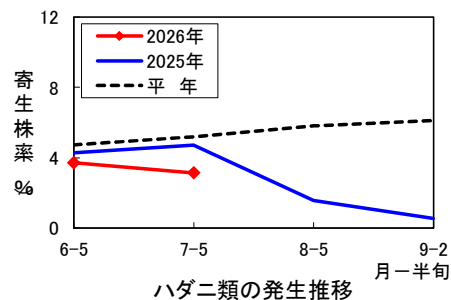
エ 薬剤感受性が低下しやすいため、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性に乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するように丁寧な散布を心掛ける。防除は摘葉後に行うと効果的である。

カ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に必ず防除を行い、本ぼにハダニ類を持ち込まないようにする。

キ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合防除を積極的に実施する。

＜県ホームページ掲載の「病害虫・雑草防除の手引き」－「IPMの推進」－「イチゴのIPMマニュアル」参照＞https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/805964_62798273_misc.pdf



【野菜：アスパラガス】※2024年度からの調査のため、平年値はない。

1 斑点性病害（斑点病・褐斑病）

(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査結果、発生量は前年・前々年並であった（±）。

発病株率 0%（前年 3.3% 前々年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

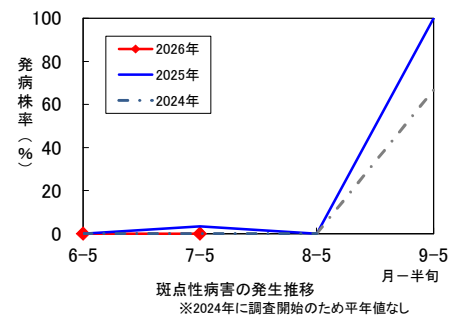
ア 発病茎葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ 不要な茎葉は除去、処分し、通風、採光をよくする。

ウ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心掛ける。

エ 病勢が進展すると防除が困難になるので、初期防除を徹底する。

オ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



斑点性病害の発生推移
※2024年に調査開始のため平年値なし

2 アザミウマ類

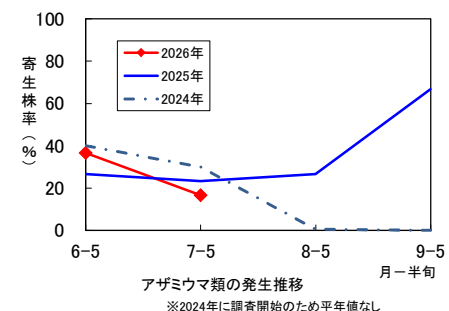
(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査結果、発生量は前年並（±）で、前々年よりやや少なかった（－～±）。

寄生株率 16.7%（前年23.3% 前々年30.0%）



アザミウマ類の発生推移
※2024年に調査開始のため平年値なし

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発生条件では防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。また、定期的な薬剤散布を実施する。

イ 過繁茂は散布むらの要因となるため、不要な茎葉を除去し、処分する。

ウ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、除草の徹底や防虫ネットの利用といった総合防除を積極的に実施する。

【野菜共通】

1 コナジラミ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月後半～7月前半の粘着板トラップにおける捕獲頭数は調査地点によって異なり、うち2地点で平年・前年よりやや多かった（±～+）。

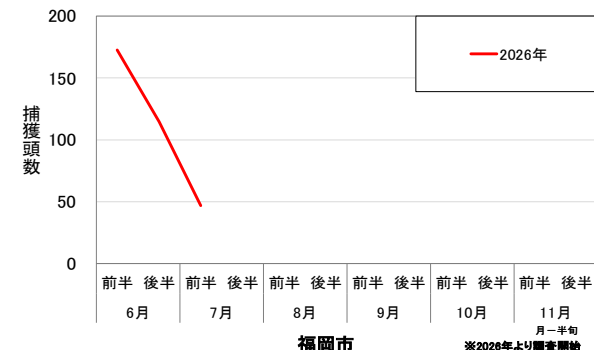
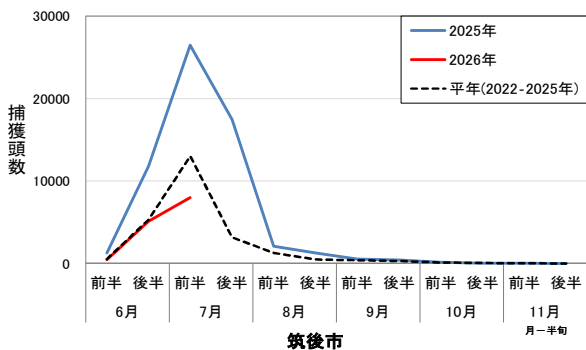
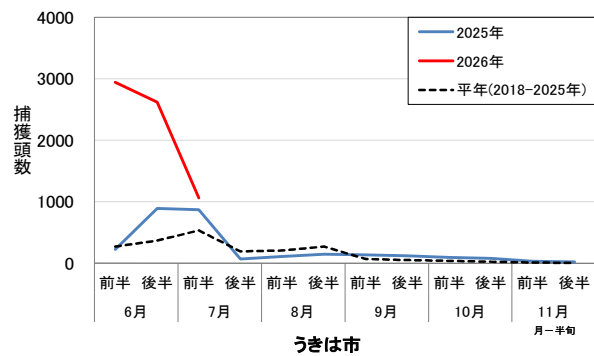
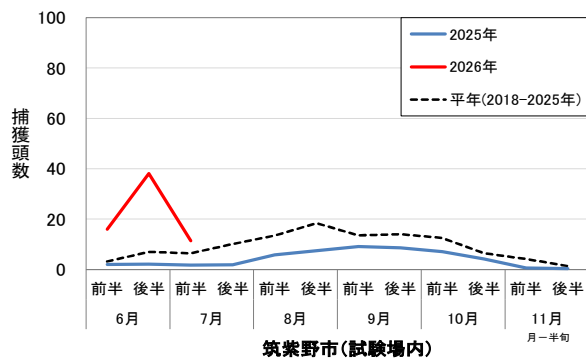
イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。

ウ 黄色粘着板等の設置により発生状況を確認し、初発段階での防除に努める。



黄色粘着板におけるタバココナジラミの捕獲頭数
注) 冬春トマト栽培施設周囲の東西南北4か所に黄色粘着板を設置

エ 苗による持ち込みを防ぐため、育苗時から防除を行い、本ぼへの持ち込みを防ぐ。

オ 栽培終了時はハウスを密閉して蒸しこみ（約50℃で7～10日間程度）を行い、ハウス外への分散を防ぐ。

カ 「入れない、出さない、増やさない」対策を徹底する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった。(±～+)。

発病葉数 3.8 葉 (平年 2.0 葉、前年 0.3 葉)

発病ほ場率 77.8 % (平年 54.1%、前年 40.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(－～±)。

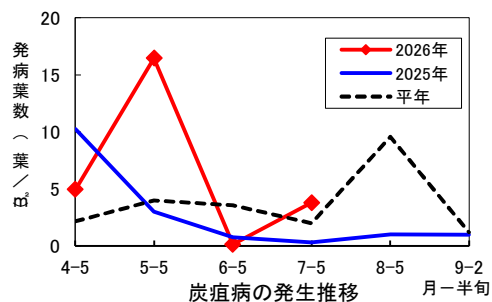
(3) 防除上注意すべき事項

ア 雨滴により胞子が飛散伝搬するため、防除は降雨前日までに実施する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 摘採・整枝後の残葉での発生に注意し、秋芽萌芽期の防除を徹底する。

また、9月頃まで発生が増加するので、防除は降雨前日までに実施する。



2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

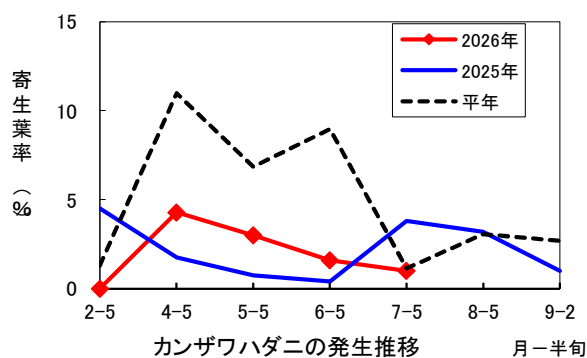
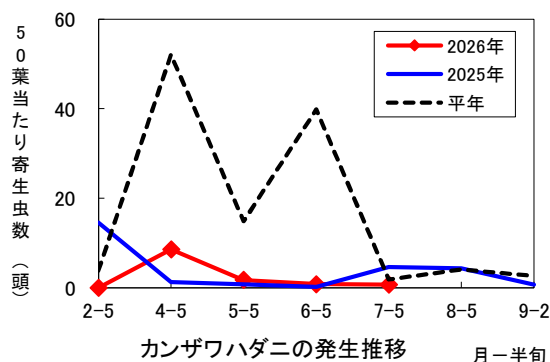
ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(－～±)。

50葉当たり虫数 0.7 頭 (平年 1.9 頭、前年 4.6 頭)

寄生葉率 1.0 % (平年 1.1 %、前年 3.8 %)

発生ほ場率 30 % (平年 11.5 %、前年 60 %)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発している園では、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

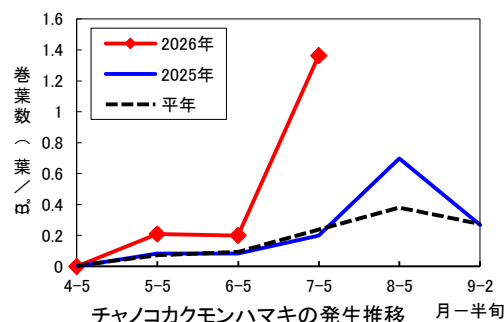
(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

1㎡当たり葉巻数 1.36 葉 (平年 0.24 葉、前年 0.20 葉)

発生ほ場率 60.0% (平年 26.6%、前年 30.0%)

イ 4月1半旬～7月5半旬までのフェロモントラップ



による雄成虫誘殺数は、平年よりやや少なかった（－～±）。

誘殺数：チャノコカクモンハマキ <うきは市> 592頭（平年 652頭、前年 1,112頭）
<八女市> 674頭（平年 1,629頭、前年 590頭）

※グラフはp.10【果樹：カキ】の項参照

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から7～10日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。

4 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年よりやや少

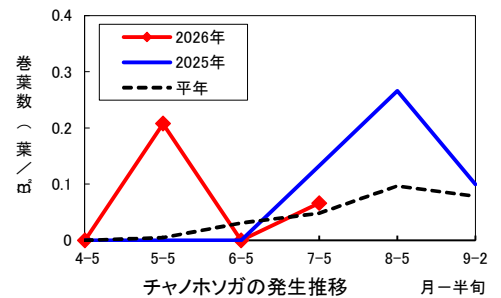
(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
1㎡当たり葉巻数 0.07 葉（平年 0.05 葉、前年 0.13 葉）
発生ほ場率 20 %（平年 35.4 %、前年 30 %）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から7～10日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。



5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

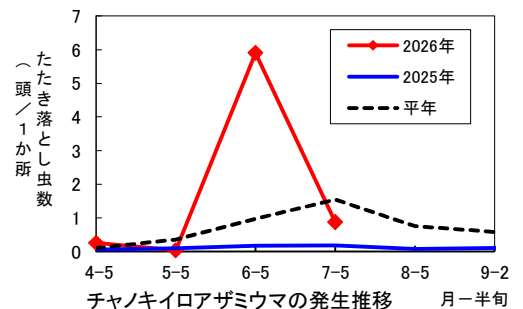
(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった。（－～±）。
たたき落とし虫数 0.88 頭（平年 1.54 頭、前年 0.18 頭）
発生ほ場率 60.0 %（平年 64.6%、前年 40.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア B 5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



6 チャノミドリヒメコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

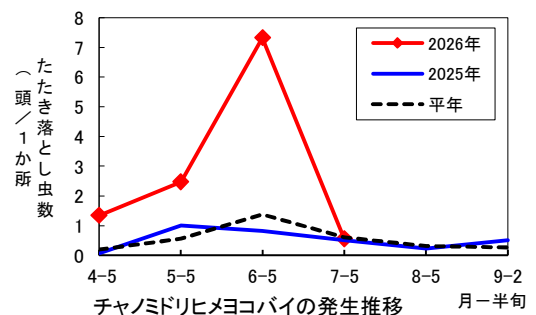
(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並だった（±）。
たたき落とし虫数 0.55 頭（平年 0.61 頭、前年 0.50 頭）
発生ほ場率 50.0%（平年 56.8%、前年 70.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 二番茶期から秋にかけて発生が多くなるため、成幼虫の発生状況に注意し、B 5判板上の10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。



イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する

7 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった。(－～±)。

寄生葉率 2.2 % (平年 8.6 %、前年 1.2 %)

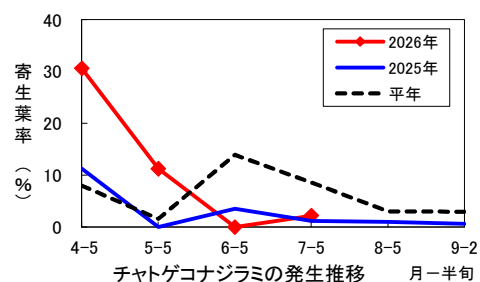
発生ほ場率 20.0 % (平年 53.3 %、前年 40.0 %)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生し、防除適期は成虫発生後の若齢幼虫発生期である。成虫が最も多い時から14日後を目安に防除を行う。

イ 幼虫は葉裏に発生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。農薬を使用する際は、使用者自身の安全確保はもちろん、周囲の人や家畜、隣接する作物、河川等の環境への影響にも十分配慮してください。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。※同一農薬であっても、メーカーによって登録内容が異なる場合があるので、しっかり確認する。

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として適正に処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。残液は、ほ場外への流出や環境、後作へ影響が生じないように十分配慮し、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壤に散布する。

※農薬散布に際しては、残液が出ないように必要な量の散布薬液を準備する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。

病虫害防除所のホームページでは、各種病虫害の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用ください。

○福岡県病虫害防除所のホームページへのアクセス

URL : <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html>

または右 QR コード①

○X のアカウント（福岡県農作物病虫害情報）へのアクセス

URL : https://x.com/PPDPO_Fukuoka または右 QR コード②

①⇒



②⇒

